



生き生きとした自分を見つめるための実用生活誌

はじまりのページ

Shukokai-Magazine The page of beginning

2017 Winter NO.38

特集・ついに到来——

“ステージⅣ”が 治癒する時代

「宣告されても、決してあきらめる必要はありません」

ダイジェスト版



“ステージⅣ”が 治癒する時代

「宣告されても、決してあきらめる必要はありません」

If you told you are “stage IV cancer”,
you need not give up your life



免疫療法が大きくステップアップしたのは、樹状細胞の働きが明らかになったことがきっかけでした。それからおよそ35年後、日本に革新的な免疫療法——HITV療法が誕生しました。今回の特集では誕生から9年を経たHITV療法の成果と、同療法がもたらす“がん治療の未来”を解説します。

一人ひとりを大切に進む

蓮見賢一郎 医療法人社団 珠光会 理事長

あけましておめでとうございます。今年の干支は「酉」です。一般的には、酉＝鶏と解釈されますが、鶏は古事記にも登場するほど由緒ある動物だとか——。天の岩戸に隠れた天照大御神を外に出すため、諸神が大宴会を催した際、甲高い啼声をもつて加わったのが鶏（常世長鳴鳥）だということです。夜明けを告げる鶏は「はじまり」の象徴として、古来より大変縁起のいい動物といわれてきたわけです。今年、珠光会はさまざまなプロジェクトの「はじまり」を用意していますが、そのもつとも重要な「柱」となるのが、「BSL-48 International Clinic」と「BSL-48 珠光会 Clinic」です。詳細は本誌に記しますが、両クリニックの誕生により、珠光会は日本のみならず、世界中の患者様一人ひとりに、一層きめ細かなサービスを提供できるようになるでしょう。

インターネットの商業化が完了したのは、1995年だといわれています。以来、怒涛のごとく進展した情報化の波は、確かに社会の利便性を向上させました。しかし、ネットがコミュニケーションの中心を占めるにつれ、一人ひとりの人間が見えにくくなっていることも事実です。例えばインターネットやSNSでは、さまざまなメッセージが行き交っています。しかし、それらは煎じ詰めれば「文字」、すなわち「記号」に他なりません。記号の連なりに優しさや哀しさ、そして、醜さ、愛しさなど人間本来の「温もり」を盛り込むのはとても難しい——。つまり、私たちはメッセージに接して相手を理解していると思っただけで、その実、文字にできない「生身」にはまったく触れていない可能性も否めないのです。実体が見えにくくなっている時代だからこそ、私たち珠光会は、人間の生きた温もりを大切に、2017年をスタートさせたいと考えています。患者様一人ひとりの声に耳を傾け、心に寄り添い、同じ希望を胸にして——。患者様の幸福こそ珠光会が進む道です。今年も珠光会へのご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

CONTENTS

- 2 思いの言の葉 Vol.33
一人ひとりを大切に進む
- 3 特集・ついに到来——
“ステージⅣ”が
治癒する時代
「宣告されても、決してあきらめる必要はありません」
- 7 連載コミック
第33回 ほのぼの JiJi・BaBa 松 & 梅
- 8 2017年 進化する珠光会の医療
～3つの医療施設で“予防→治療”を Complete～
- 10 治癒のヒント
末期から生還した“あなた”への質問
決心を固めた理由
- 14 珠光会通信

ステージⅣの治癒率が70%を超える

「あなたのがんは、ステージⅣです……」

医師からそう宣告されたら、どんな気持ちに陥るでしょうか？

もし、あなたががんについての知識を持ち合わせているなら、この深刻さが、たどころに理解できるでしょう。そして、恐らくは大きな不安に襲われるのではないのでしょうか。

「ステージⅣ」とは、がんが最初に発生した部位（原発巣）を超え、離れた場所にある臓器に転移（遠隔転移）した状態を指します。5年生存率は全がんで約16%——。食道がん、胃がん、肝臓がん、肺・気管のがんなど、10%を切るがんもあります。（表1）

がんの種類にもよりますが、多くの場合は「手術」が困難なため、「放射線」や「抗がん剤」での治療がメインとなります。そして、こうした治療の施し方がなくなると、医師は「末期」と判断します。あとに待っているのは「緩和ケア」のみ——。ステージⅣと

は末期と隣り合わせの、文字通り生死の分かれ道となる大舞台なのです。（図1）

とはいえ、悲観する必要はありません。ステージⅣのがんに対し、驚くほど良好な成績を上げている治療法があるのです。ICVS東京クリニック^{※1}で実施されている「HITV療法」(Human Initiated Therapeutic Vaccine)がそれです。

「2008年に臨床を開始して以来、HITV療法のターゲットは「再発・末期がん」です。その成果は歴然としており、私たちはすでに100名以上の末期患者を治癒させ、社会生活に復帰させています」

そう語ってくれたのは、HITV療法の開発者である蓮見賢一郎先生（米国人法人蓮見国際研究財団理事長）です。「このHITV療法の治療結果を病期（ステージ）ごとに分析した結果、興味深い傾向が明らかになったのです」

蓮見先生は「HITV療法を受診した「肺がん」患者の追跡調査」という表を示しながら続けました。（表2 一部抜粋・改編）

「これは2009年の1月から2015年の9月にかけて、HITV療法を受診した肺がん患者の治療成績をまとめたものです。一番右側にある「奏効率」とは治療効果を示す割合のことですが、注目すべき点は赤で囲った部分——。ステージⅣを宣告されたにもかかわらず「完全奏効」、つまり、腫瘍が完全に消滅した患者様は、全員「抗がん剤」や「放射線治療」を受けず、HITV療法のみを受診しているのです」

このデータが作成された時点での割合は、ステージⅣの患者様で、HITV療法のみを受診された人の治癒率は、約67%。HITV療法を受診する前に、抗がん剤治療を受けた人の治癒率は、約2%（表3）——。現時点（2016年12月現在）では「完全奏効」に至った患者様がもう2名いるので、治癒率は70%を超えているのです。

かつては医学界の隅でしか語られることのない免疫療法が、樹状細胞の解明によって一躍スポットライトを浴びたように、HITV療法ががん治療のパラダイム^{※2}を変えるためには、数多くの臨床データを粛々と積み重ねていくことが最善です。異論のはさみようなない事実の蓄積こそが、時代を動かす確かな原動力となるからです。

ここからは、HITV療法によってステージⅣから帰還した患者様の事例を見ていきましょう。

“ステージⅣ”が治癒する時代

HITV療法が、がん治療のパラダイムを変える

余命を宣告されても当然の「がん

If you told you are “stage IV cancer”, you need not give up your life

表3 抗がん剤治療の有無による奏効率の違い

抗がん剤治療を受ける前に HITV 療法を受診	CR 数 / 患者数	奏効率 (%)
	4 / 6	約 67%
抗がん剤治療を受けた後に HITV 療法を受診		
	1 / 41	約 2%

表2 HITV 療法を受診した“肺がん”患者の追跡調査（一部抜粋・改編）

ステージ	化学療法	放射線療法	奏効率
再発	○	×	PD
再発	○	×	CR
Ⅳ	×	×	CR
Ⅳ	×	×	CR
Ⅳ	○	×	DO
Ⅳ	×	×	CR
Ⅳ	○	×	PD
Ⅳ	×	×	CR
Ⅳ	○	×	PD

CR（完全奏効）＝腫瘍が完全に消滅した状態
 PR（部分奏効）＝腫瘍の和が30%以上減少した状態
 SD（安定）＝腫瘍の大きさが変化しない状態
 PD（悪化）＝腫瘍の大きさの和が20%以上増加、かつ絶対値でも5mm以上増加した状態。あるいは新病巣が出現した状態

図1 ステージⅣのがんの特徴



表1 がんの種類別5年生存率（実測生存率）

種類	ステージ	5年実測生存率 (%)
食道	Ⅳ	9.1
胃	Ⅳ	7.2
直腸	Ⅳ	14.5
肝臓	Ⅳ	7.7
肺・気管	Ⅳ	4.3
乳房	Ⅳ	32.2
前立腺	Ⅳ	43.6

※ 公益財団法人 がん研究振興財団「がんの統計'11」を改編

※4 縦郭リンパ節：縦郭は特定の臓器の名称ではなく、胸膜によって隔られた左右の肺の間を指す。この部分にはリンパ節のほか心臓、大血管、食道などが属する
 ※5 IMRT：強度変調放射線療法。コンピュータを用いて正常細胞への放射を抑え、腫瘍部分のみへの集中的な放射を可能にした放射線技術

※1 ICVS 東京クリニック：珠光会が2008年に開設したHITV療法の専門医療機関。Tel 03-3222-0551
 ※2 パラダイム：ある時代や分野において支配的規範とする“物の見方や捉え方”
 ※3 肺腺がん：肺がんを組織型で分類した場合の一種。肺がんの60%を占めるといわれており、日本では一番発生頻度が高い

ほのぼのJiJi・BaBa
松 & 梅



薄化粧

おや、今日は薄化粧だね

しかし、いつ見てもキレイだなあ

ほればれするね

まさにジャパニーズビューティーだな

そんな器量の良い人、ご近所にいたっけ?

富士山か...

優雅だなあ

凧揚げ

凧を作ろう!

でも布がないよ

ゴミ袋でも作れるよ

骨組になる竹ひごもないし...

ストローで大丈夫!

すごいなあ、松じい

さあ、完成した! 凧をあげにいこう

あ!でも

凧をあげる空がないよ...

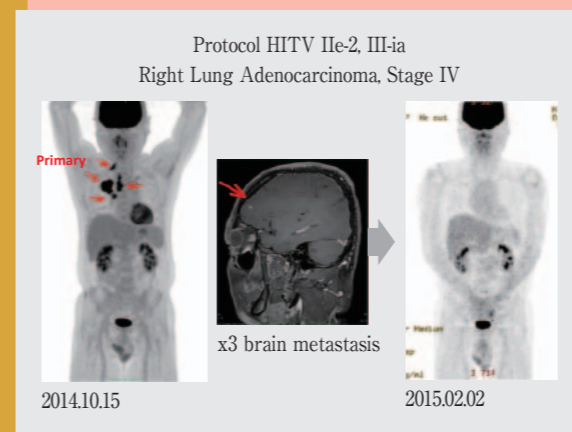
小林 裕美子

マンガ家/イラストレーター
東京造形大学・デザイン学科卒業。イラストレーターとして、実用書や児童書、雑誌、WEB媒体、新聞等に挿絵やマンガを描いている。『美大デビュー』(ポプラ社)、『もちもち』(徳間書店)、『親を、どうする?』(実業之日本社)、『私、産めるのかな?』(河出書房新社)、『親が、倒れた! 桜井さんちの場合』(新潮社)、『産まなくてもいいですか?』(幻冬舎)など著書多数。

If you told you are "stage IV cancer", you need not give up your life

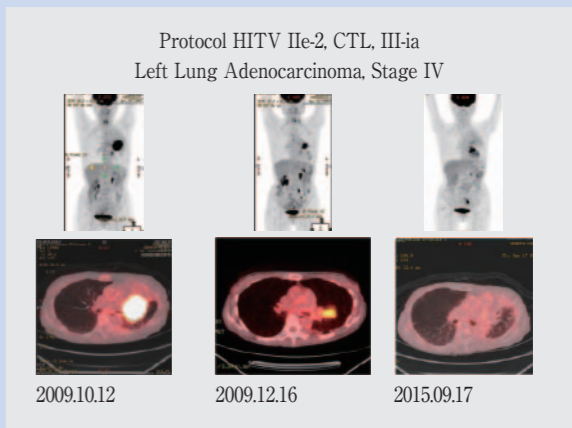
Case1 「肺腺がん」が3か月で完全奏効

Aさんは50代の男性。右の「肺腺がん」が縦郭リンパ節^{※4}へ転移、さらに脳へ転移したことからステージIVの診断を受けました。すぐにICV S東京クリニックを受診したものの、本人は治療より延命を意識していたそうです。
しかし、HITV療法とIMRT^{※5}を組み合わせたあと、HITV療法と抗がん剤の組み合わせで治療した結果、おおよそ3か月で完全奏効——腫瘍の消滅に至りました。



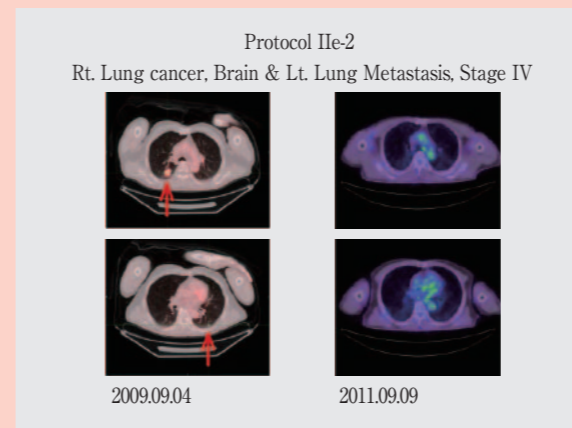
Case2 巨大腫瘍が消滅

Bさんは60代の女性。左の肺に10センチ以上の巨大腫瘍が生じていました。胸水があり、縦郭リンパ節への転移も認められました。
Aさんと同じく、最初はHITV療法とIMRT、次にHITV療法と抗がん剤のコラボレーションで治療しましたが、腫瘍の消滅までには至りませんでした。そこで、さらにCTL療法^{※6}を組み合わせた結果、無事完全奏効を迎えることができました。



Case3 「膀胱がん」も治癒

70代男性のCさんは、「脳腫瘍」と診断され、開頭手術を受けました。その際生検した腫瘍から、原発が「肺がん」であることが判明したのです。HITV療法とIMRTの組み合わせで治療し、約6か月後には完全奏効に至りました。Cさんはその後「膀胱がん」を発症しましたが、これはハスミワクチンで治癒しています。



治療条件は「未治療のまま受診する」と

5年生存率が10%前後のステージIVのがんを、70%の確率で治癒させることが可能——。この夢のような数字が、着々と現実のものとなっています。ただし、と蓮見先生は続けました。「この確率には条件があることを忘れてはなりません。HITV療法を始める前に、放射線や抗がん剤を受けないこと、つまり、「未治療」のままHITV療法を受診することです。それが奏効率を向上させるポイントになるわけです」
未治療であることと奏効率の因果関係には、がんが治療に対して獲得する「耐性」^{※7}が関与していると思われるのですが、今のところ明確に解明されているわけではありません。しかし、データの蓄積・解析に伴い、理由が明らかにするのは時間の問題。近々詳細をお伝えできるはずですよ。
いずれにしろ、ステージIVを宣告されても、あきらめる必要はありません。必ずや、HITV療法が生きる希望となってくれるからです。(了)

※6 CTL療法: 体外で培養したT細胞を樹状細胞を使って教育し、殺傷力の高いCTL(キラーT細胞)へ育て上げ、再び体内に戻すことで、がん腫瘍への集中攻撃を目指す治療法
※7 耐性: 病原菌などが一定の薬物・治療などに対して獲得する抵抗力



細胞の「生産」と「臨床」の場を一体化させる

2017年春をもって、珠光会グループの医療施設は、次のように生まれ変わります。

まず、「BSL-48 Clinic」は名称を「BSL-48 珠光会 Clinic」と改め、東京・阿佐谷の、旧珠光会診療所へ移転します。この措置には、主に2つの理由が挙げられます。一つは治療のクオリティを一層向上させること、もう一つは情報交換の場を設けること——です。

現在、珠光会で施術可能な免疫療法には、ハスミワクチンをはじめNK細胞療法^{※1}、LAK療法^{※2}などさまざまなバリエーションがありますが、それらの治療に用いられる細胞は、「細胞療法センター」「東京リサーチセンター」で培養・管理されています。

両施設と研究・開発の基幹施設である「蓮見癌研究所」は同じ旧珠光会診療所内にあり、協力しながら高

品質の細胞を生産していますが、この研究・開発・生産のラインに「治療」を組み込むことで、細胞の調整から施術までの距離を短縮させ、よりクオリティの高い効果を提供しよう——というのが、移転の最大の狙い입니다。生産と臨床の場を一体化させることで、今後患者様には一層フレッシュな免疫療法を受診していただけるかと確信しています。

また、がん治療には心のケアも不可欠——。患者様同士さまざまな情報を交換することは、治療に対する知識を深めることのみならず、ストレスの軽減という面からとても大切なことです。「BSL-48 珠光会 Clinic」には、ささやかではありますが「待合」もつらえてあります。患者様相互の親睦を深めるためにも、お気軽にお立ち寄りいただければ幸いです。

予防の概念を超えた新しい「がん予防セラピー」

2014年より活動してきた

「K-101 Clinic」は、名称を「BSL-48 International Clinic」に変更し、ホテルニューオータニガーデンコート1階（現在のBSL-48 Clinicの場所）で、新たなスタートを切りま

す。これは新しいがん予防法——「Pre-HITV療法」を開始するための措置です。「ICVS東京クリニック」で施術されている「HITV療法」は、ステージIVのがんに多大な治療効果を発揮しますが（特集参照）、このHITV療法のシステムをがん予防にシフトチェンジさせたものが「Pre-HITV療法」です。

予防を超え、治療効果も望めることから、「がん予防セラピー」とも呼ばれています。2人に1人ががんになり、3人に1人ががん死する時代、「Pre-HITV療法」は健康長寿のために「必須」といえるのではないのでしょうか。

また、HITV療法に対する国際的な関心の高まりを受け、最近海外からの受診希望者が急増しています。「Pre-HITV療法」に

ついても同様の傾向が見込まれます。BSL-48 International Clinic」には、海外の患者様に対応する専門スタッフを配置する予定です。もちろん、ハスミワクチンや各免疫細胞療法などは、今まで通り受診していただけますので、ご安心ください。

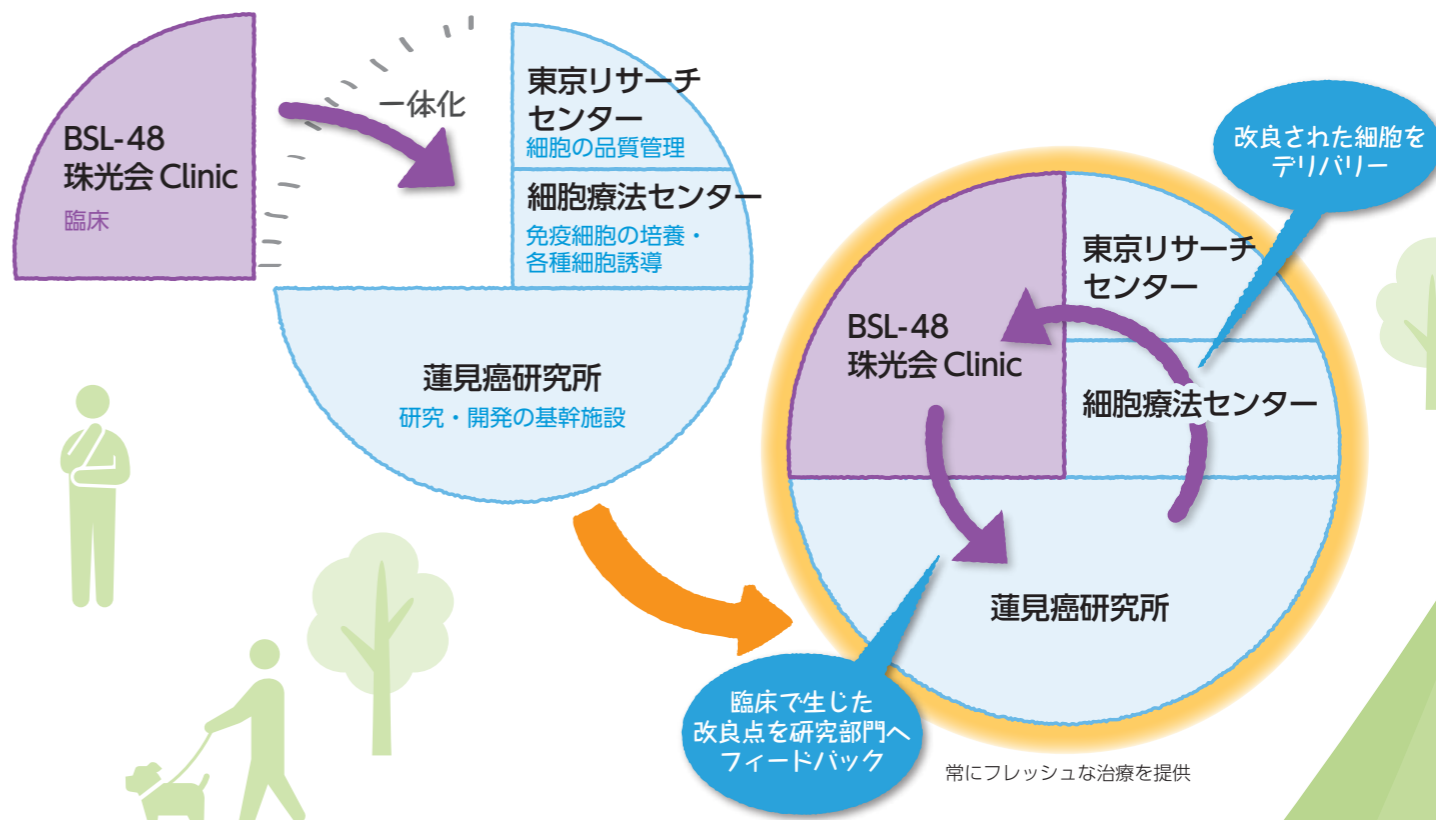
がん予防の概念を超え、治療効果も狙える「がん予防セラピー」。「Pre-HITV療法」、治療と予防の両面効果を有する万能型ワクチン「ハスミワクチン」、ステージIVのがんを治療する「HITV療法」——。がんの予防から治療まで「コンプリートする珠光会の医療は、「BSL-48 International Clinic」「BSL-48 珠光会 Clinic」「ICVS東京クリニック」という3つの医療施設において、今後益々研鑽を重ねてゆく所存です。

「免疫療法」の力で「がんの苦痛のない生き生きとした社会」を創造する

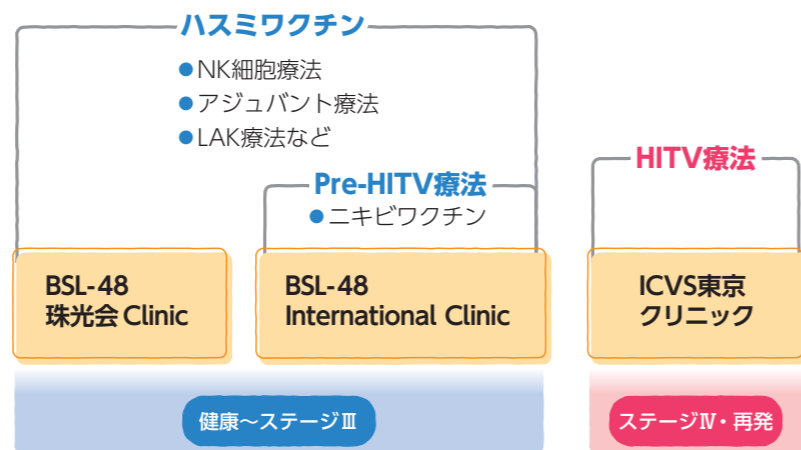
開院以来70年にわたり受け継がれてきた願いが叶う日まで、珠光会の歩みが止まることはありません。

BSL-48 珠光会 Clinic

細胞の「生産」と「臨床」を一体化



■ 珠光会——「施設別」治療ガイド



※ハスミワクチンはステージIVでも有効

2017年 進化する 珠光会の医療

完全網羅 ~ 3つの医療施設で「予防→治療」を Complete ~

前号でもお知らせしましたが、2017年春、珠光会グループに新たなクリニックが加わります。その名は「BSL-48 International Clinic」。新クリニックの誕生によって進化する珠光会の治療、各施設の役割についてご説明します。

※1. NK細胞療法：NK細胞とは、人間が生まれながらに持っている免疫（自然免疫）に存在する細胞。このNK細胞を活性化させ、異物を排除しようというのがNK細胞療法
 ※2. LAK療法：血液からリンパ球を分離し、免疫活性物質を使って培養。それを増殖させて体内へ戻すという方法。免疫療法の基本というべき療法

決心を固めた理由

今回のゲスト
 山本 道子さん 66歳 (仮名)
 Yamamoto Michiko

東京・多摩市の高台“聖ヶ丘”に、珠光会グループの介護老人保健施設「聖の郷」が建っています。今回の主人公は、そこに看護師として勤務する山本道子さん(仮名)。生き生きとした職場……と語る「聖の郷」の空気も一緒にお届けします。

診断名は「悪性リンパ腫」

介護老人保健施設(老健)とは、介護保険法に基づく介護保険施設のひとつ。比較的症状が安定している要介護状態の高齢者を対象に、自宅での生活復帰を目指して、日常生活の世話や看護・医療・リハビリテーションなどのサービスを提供する施設を指します。介護老人保健施設「聖の郷」が誕生したのは1999年の春――。山本さんは現在地に転居してきて、前から評判を聞いていた「聖の郷」への就職を希望し、2002年から勤めています。

「一般病院と老健……同じ看護師が働く場所でも、後者は常に患者様の全体に目配りしなければなりません。どんな不調に悩んでいるのか、どんな食事や運動をしているのか……。それら細かい生活の在り方が、すべてみなさまの健康につながってくるのですから」

山本さんが体調不良を覚えたのは、2011年の夏でした。腸腰筋膿瘍という病名で、整形外科に10日間入院し、点滴治療しました。治療効果なく某公立病院の整形外科から血液内科を紹介され、生検の結果、下った診断は「蜂窩織炎」。黄色ブドウ球菌やレンサ球菌などによって発症する感染症です。

「けれど、皮膚科でいただいたお薬を服用しても一向に腫れが引きません。結局、病名を確定できないまま様々な病院で検査を受けることになったのですが、ようやく某公立病院で下った診断は「濾胞性リンパ腫」……悪性リンパ腫だったのです」

本誌前号でも解説しましたが、悪性リンパ腫とはリンパ節内の「リンパ球」が異常に増殖してしまう病気です。病理組織所見により「ホジキンリンパ腫」と「非ホジキンリンパ腫」に分けられ、濾胞性リンパ腫は非ホジキンリンパ腫に分類されます。グレードは1〜3まであり、1〜2は年単位で進行する、低悪性度、3

は月単位で進行する、中悪性度。山本さんは低悪性度と診断されました。

「肺がんになった父が、ハスミワクチンで病気をコントロールしていたので、私も自分ががんだと診断されたら、ハスミワクチンを使おうと決めていました。自家ワクチンができたのは、抗がん剤治療のため、公立病院に入院している最中でした」

「治癒はない」といわれて

山本さんはベテラン看護師です。病気の知識はもとより、医師も含めた病院スタッフが患者様に接する場合のマナーも、よく心得ています。そんな山本さんが大きなショックを覚えた出来事がありました。

「公立病院で、初めて病気について説明を受けたときのことです。最初、医師はメモ用紙に「寛解」という言葉を書きました。次に「治癒」と書き、そこに×を付けたのです」

医師は抗がん剤の治療計画を大雑把に描き、こう続けたといっています。――この病気は「寛解」はするけれど、「治癒」はありません。抗がん剤が功を奏する期間は、次第に短くなっていくでしょう。そして、最後は病気が勝ってしまうのです……。

「なんてひどい言い方なのだろうって思いました。ご本人は客観的な告知を心掛けているのかもしれませんが、希望の欠片もな

The Reason of The firm resolution

いのですから。病気と闘おうという意志も萎えてしまいますよ」

公立病院の冷徹な一面を表すエピソードですが、ハスミワクチンについても同様でした。「免疫療法をやるなら、当院での治療はお断り」と告げられた山本さんは、仕方なく病院には内緒でワクチンを続けたといっています。

曇りがちな心をなんとか奮い立たせ、ハスミワクチンと抗がん剤で治療に励む山本さん。――朗報は、突然舞い降りてきました。窮状を見かねた、聖の郷の施設長(当時)が、蓮見賢一郎先生の診察予約を取ってくれたのです。

「もちろん、HITV療法のことは知っていましたが、なんとなく二の足を踏んでいたのです。けれど、背中を押されるように蓮見先生とお会いして、気持ちが一気に晴れ晴れしました。だって先生は私の検査データをご覧になり、大丈夫、治りますよ」といつてくださったのですから」

公立病院では「治癒はない」と宣告された山本さんの心に、蓮見先生の言葉は力強く、そして、優しく沁み込んでいきました。

「一方は「治らない」、もう一方は「治る」というなら、後者を選択するのは当然でしょう。病院からは改めて、HITV療法を行うなら治療は中止、だといわれましたが、蓮見先生と相談し、HITV療法のみ

に懸ける決心を固めたのです」

治療中も普通に「仕事」ができた

「最初PETを撮ったときは、体中にがんが飛び散っていて、まるで「花火」のようでした」と、山本さんは語ります。

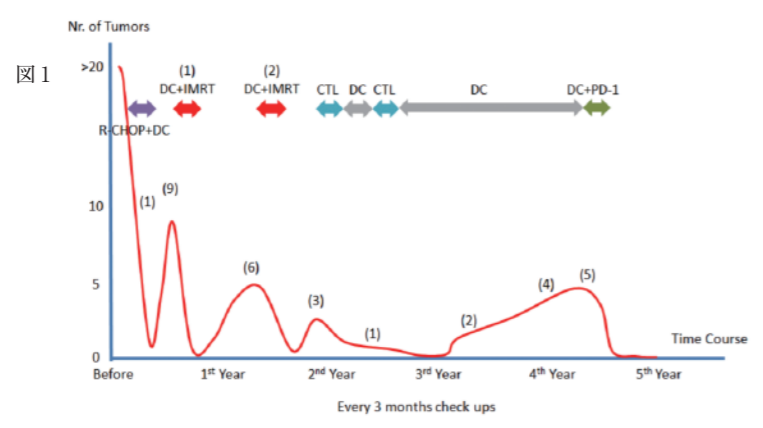
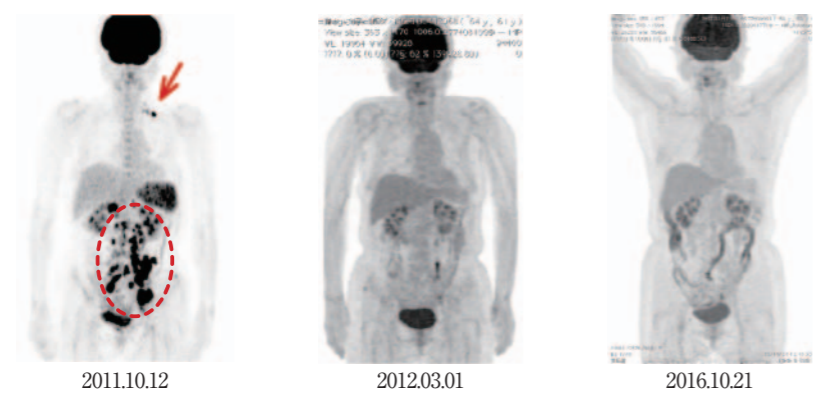
「蓮見先生は、それらが腫瘍に一つずつ樹状細胞を注入していくのですが、まったくといっていいほど痛みがないのです。すごい技術だな……と感心しました。施術後も、普通に電車に乗って帰れたんですよ」

介護老人保健施設「聖の郷」



治癒へのデータファイル 017

氏名：山本 道子さん（仮名） 女性 66 歳
 臨床診断：悪性リンパ腫
 病理診断：Malignant Lymphoma
 病期：IV
 病歴：2011.10.12 PET-CT 検査（51ヶ所の多発性リンパ節腫大）
 2011.10.18 左ソケイリンパ節生検にて Follicular Lymphoma の診断
 2011.10.21 アフェレーシス（1）
 2011.10.26 R-CHOP 5 コース開始
 2011.11.10 DC（11/29, 12/20, 2012/01/19, 07/03, 2013/02/26, 03/14, 05/16, 06/10, 07/11, 08/12, 11/21, 2014/05/28, 07/02, 08/04, 09/02, 10/07, 11/04, 12/02, 2015/01/06, 02/05, 03/05, 03/31, 05/14, 08/04, 10/22, 12/17, 2016/03/08）
 2012.03.01 PET-CT：左腸腰筋の残存病巣
 2012.06.08 PET-CT：左腸腰筋ほか傍大動脈リンパ節、左腸骨リンパ節に新病巣
 2012.06.20 IMRT 32.14Gy/5Fr/7D
 2012.08.11 PET-CT：CR
 2016.01.08 PET-CT：左鎖骨上リンパ節、左大殿筋リンパ節に新病巣
 2016.02.09 PDL-1（左鎖骨上リンパ節、左大殿筋リンパ節）
 2016.04.22 PET-CT：すべて CR
 2016.10.21 PET-CT：CR



蓮見先生のコメント

第IV期の悪性リンパ腫ということで、かなり治療にてこずりました。治療開始時期が2011年10月で完全な病巣の消失（CR）は2016年4月でした。
 図1の腫瘍数（縦軸）と時間（横軸）をご覧くださいと、化学療法とIMRTの併用した結果、経過とともに腫瘍数が減少していきます。しかし、治療開始4年目を迎えてから腫瘍数の再上昇が見られ、この時点でCTLに対する耐性化が疑われました。最終的には抗PDL-1の導入によって完全寛解を迎えることができました。直近の10月21日のPET-CT検査にても新病巣は認めていません。



トレーニングルーム



ロビー



病室



ダイニングルーム

治療中、日常生活を普通に過ごせる点も、HITV療法の大きなメリットなのです。厚生労働省の集計によると、現在日本でがん治療のため仕事を続けながら通院している人は、男女合わせて32・5万人にのぼるといいます。抗がん剤などの苦痛と闘いながらの就労がどれほどつらいことか……。最新免疫療法であるHITV療法には副作用がありませんので、働きながらのがん治療にはうってつけの療法といえるでしょう。

「PETを撮るたびに腫瘍が減っていくので、自分がどんどん回復していく手応えを実感できました」

山本さんの腫瘍がすべて消えたのは、治療開始から4年経った2015年。以来現在に至るまで、再発の兆候はまったくありません。

◆ ◆

山本さんは「聖の郷」を、働き甲斐のある職場だといいます。「スタッフがみんな温かい……。働いていて本当に楽しいです」

「楽しい」と感じる時、脳内では神経伝達物質のセロトニンが分泌されています。このセロトニン、実は「集中力」の源でもあるのです。つまり、楽しいと感じる職場

では自然と集中力が高まり、クオリティの高い仕事ができるというわけです。「利用者みなさまも、聖の郷の雰囲気はとても良いといってくださいませ」

そう語ってくれたのは、現・施設長の伊藤京子さん。伊藤さんは「聖ヶ丘病院」の看護師時代、聖の郷の設立に携わった生え抜きです。

「私たちが心がけていることは、利用者の心を動かすことです。筋肉と同じように、心も動かさねば硬く萎縮してしまいます。ですから、楽しいと思ったり、美しと感じたりする機会をできるだけ作って差し上げるよう、スタッフ一同創意工夫の日です」（伊藤さん）

「生きていれば、やがて死は必ず訪れます」と山本さんは語ります。「たった一度きりの生命……。だからこそ、できる限りの治療を受けていただきたいと思うのです。生命は自分だけのものではなく、家族や友達、そして、これから出会う大切な誰かのものでもあるのですから」

未曾有の高齢化社会を迎えた日本……。今後、がん治療と同様に充実が求められるのは、高齢者が屈託なく笑い合える「場」作りなのかもしれません。山本さんや伊藤さんが働く「聖の郷」を訪れる人のオアシスとして、みなさまの心にとぎめきを蘇らせ続けることを願ってやみません。

『第13回 紀尾井フォーラム・定期健康講座』のお知らせ

見えてきた第Ⅳ期のがん治療

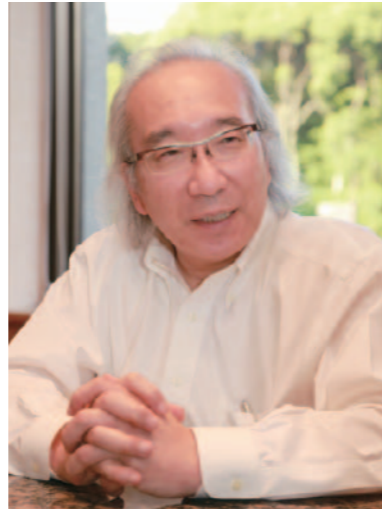
『宣告されても、決してあきらめる必要はありません』

■ 講師：米国法人 蓮見国際研究財団理事長 蓮見 賢一郎先生

● 症例が語る“ステージⅣ”から帰還する治療

本誌特集でも解説した通り、HITV療法の新しい可能性がスポットライトを浴びています。末期から緩和ケアへの入り口——“ステージⅣ”について、驚くべき奏効率(5頁参照)を発揮することがわかってきたのです。最新のデータでは、ステージⅣを宣告された患者さんを、約70%の確率で腫瘍の消滅、つまり、“完全奏効”へ導くことが検証されています。

今回の講演ではHITV療法の新たな可能性を、具体的なデータを挙げながらわかりやすく解説。また、この高い治癒率を実現させるための“条件”についても説明します。併せてハスミワクチンなど、他の免疫療法を組み合わせた治療メニューについてもお話いたしますので、現在免疫療法を受診されている方はもちろん、受診を検討されている方にとっても大いに参考になる講演といえるでしょう。免疫療法の新たな幕開けを告げる1時間30分——。みなさまのお越しを心よりお待ちしております。



■ 日時：2017年1月28日(土)

午後2時～午後3時30分 ※開場は午後1時30分

■ 場所：紀尾井フォーラム

東京都千代田区紀尾井町4-1 ニューオータニガーデンコート1F TEL.03-5213-6886

講演はすべて入場無料です。

お問い合わせは——免疫療法コンシェルジュ
03(3556)1950 までお寄せください。

『免疫療法コンシェルジュ』
<http://wellbeinglink.com/>



※『紀尾井フォーラム・定期健康講座』は、すべて入場無料です。

※お申込み・お問い合わせは『免疫療法コンシェルジュ』☎03-3556-1950までお電話ください。Web Site『免疫療法コンシェルジュ』では、メールによるお申し込みも行ってまいりますので、そちらもご利用ください。

Report

第12回 定期健康講座を開催

テーマは「白内障」と「緑内障」

● 手術例なども動画で解説

さる11月26日(土)、東京の紀尾井フォーラムにおいて、「第12回定期健康講座」が開催されました。超高齢社会を背景に益々深刻な病気となっている「白内障」と「緑内障」について、眼科のオーソリティ戸張幾生先生(東邦大学名誉教授)に解説していただきました。

白内障は眼球の“水晶体”という部分がたんぱく質の変化などを原因として、“白く濁って”しまう病気。

ものがぼやけたり、かすんだりして見える、といった症状が現れます。

緑内障は眼圧(眼球の圧力)によって、視神経が侵される病気です。一度喪失した視力は元に戻せないのが、失明の可能性をはらんだ怖い病気といえるでしょう。

いずれにしても、イラストに示した症状を感じたら、専門医の診断を受けることが肝心です。

「白内障」「緑内障」は、身近なテーマだけに質疑応答も活発。みなさま戸張先生の解説に頷いていました。目は日常生活の“かなめ”です。日常のQOL(生活の質)を損なわないためにも、ぜひ本講演をお役立てください。

※この講座の様子は、Web site『免疫療法コンシェルジュ』において動画でご覧いただけます。講演内に上映された白内障の「眼内レンズ挿入術」の動画も見られますので、参考にしてください。

● “目のトラブル”のサイン



珠光会通信

Shukokai Communication

Topics

冬だけなわ——
「リフレッシュユガール」の
出番です

● 冬を快適に過ごす、必需品



珠光会の風邪治療薬「リフレッシュユガール」は、ハスミワクチンに含まれる、アジユバントを核に、風邪に対する効能を一層強化させた治療薬です。使用法はとも簡単——。コップに炭酸水か水を30mlほど入れ、リフレッシュユガールを混ぜます。あとはその溶液でうがいをするだけ……。咽喉部に常在する樹状細胞を、アジユバントを含んだ溶液が活性化させることで、免疫力が局所的に上昇——。原因菌の排除を促す、というわけです。リフレッシュユガールには消炎作用もあるので、のどの炎症を抑えることもできます。

咳き込みが激しく、うがい辛い場合は、ネブライザー(吸入器)を使用するという手があります。水(規定量)で希釈したリフレッシュユガールを蒸気にして吸い込むと、薬剤をのどの深部まで届けられるので、高い効果を得ることができるのです。人間は寒ければ寒いほど、体内に熱をキープしようとするため、エネルギーを消費します。つまり、寒さは体力と免疫力を同時に低下させる原因だともいえるのです。だからこそ、免疫力を上昇させ、風邪原因菌を排除するリフレッシュユガールは「一石二鳥——。冬を快適に乗り切るための必需品」といえるでしょう。

※「リフレッシュユガール」についてのお問い合わせは、BSL48Clinic TEL・Online:03-67404470。

Report

広島に「がんでお悩みの人のための例会所」ができました

● 清浄な「氣」に満たされた場所

広島市で長年ハスミワクチンの治療を続けている医療法人寿会 永山医院。その名誉院長永山多壽子先生が、市内から自動車1時間余りの山間に、患者様のための例会所「氣の道」を開設しました。永山医院には、患者様同士の交流の場として「すぎな会」と「つくし会」という2つの患者会があります。会員のみなさまが、清浄な氣を浴びて、少しでも早く健康を取り戻すようにという願いを込めて設立したのが「氣の道」です。門名の通り、その場に佇んでいると、心が自然と澄み渡り、生命がパチパチと爆ぜるような感覚に満たされます。敷地内には、井戸を掘ったら湧き出たという「銘水」があり、地元の人もその氣のこもった湧水を持ち帰ることがあります。

がんの治療には、少なからず辛い経験が付いて回ります。疲れた心身を癒し、生きる力を再起動させるためにも、「氣の道」は大いに役立つくれるでしょう。



※この記事については、Web Site『免疫療法コンシェルジュ』の「交流広場」でもご覧いただけます。
<http://wellbeinglink.com/>



開所式に集まったみなさま(前列向かって左から2番目が永山先生)



永山多壽子先生と山田新一郎先生(名古屋医専)。山田先生は氣の専門家

もちろん、門戸は大きく開かれていますので、会員でない方も気軽に永山医院へ声を掛けてみてはいかがでしょうか。

「蓮見賢一郎先生・福岡講演会」が開催されました

●話題の治療薬についても解説

さる11月12日(土)、福岡市の「アクロス福岡」で、毎年恒例の「蓮見賢一郎先生講演会」が開催されました。当日は爽やかな晴天――九州はもとより、広島や徳島など、近在からも多数のみなさまにご来場いただきました。

この日の演題は『進化を遂げる免疫療法』。がん治療の最前線では何が起きているのか、今後何が起くるのか……現状と未来予測について、データを挙げながらわかりやすく解説していただきました。

特に興味深かったのが、「オプジーボ(一般名：ニボルマブ)」について――。ご存知のとおり、薬

価改定で話題になった「チェックポイント阻害剤」と呼ばれる分子標的薬です。がんは免疫システムから逃れるための「仕組み」を持っていますが、オプジーボはこの仕組みを抑制することで、免疫によるがんへの攻撃を促進させる効果があります。

登場時には、夢の治療薬として期待されましたが、臨床例の増加と共に問題になったのが重篤な副作用。厚生労働省は2016年7月、注意喚起と情報提供を呼び掛ける文書を日本医師会、日本薬剤師会などの関係団体へ出しました。

しかし……と、蓮見先生は語りました。

「オプジーボは、使いどこ



会場となった「アクロス福岡」



「懇親相談会」。多くの質問と答えが行き交った

ろ、さえ間違えなければ、大変有用な薬剤です。実際、我々はオプジーボとHERT-V療法をコラボレーションさせることで治療の停滞を打破し、患者様を治癒へ導いた経験があります」

今さら説明するまでもなく、蓮見先生は30年にわたり免疫療法のトップランナーとして、最前線をけん引してきた専門医です。それは免疫システムの微細で現実的な振る舞いまで熟知しているからこそその発想であり、少し大げさにいえば、蓮見先生だからできたオプジーボの新しい使い方もいえるでしょう。

講演後行われた「懇親相談会」も実践的な交流の場となり、福岡講演会は満足の余韻を残しながら幕を閉じました。

 からお知らせ

2017年は「地方講演会」に加え、「交流・勉強会」もスタート

昨年「免疫療法コンシェルジュ」は、全国4都市で蓮見賢一郎先生の地方公演を開催いたしました。今年は地方講演に加え、地域のみなさまと一層交流を密にし、がん治療の最新情報について見識を深めていただくため、「交流・勉強会」をスタートさせる予定です。詳細はWeb Site『免疫療法コンシェルジュ』でお知らせいたしますが、スタッフ一同みなさまにお目にかかれることを、楽しみにしております。本年もよろしくお願い申し上げます。

「免疫療法コンシェルジュ」スタッフ一同